連合研究科共同研究プロジェクト研究成果報告書

プロジェクトの名称	「包括的健康教育プログラム構築に向けての国際学術研究－生命科学，行動科学，情動科学の複合領域の視点によるアプローチー」		
研　究　期　間	平成 27 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日	プロジェクト記号	R

チーム構成員の氏名・職名等・所属（配属）大学　（◎：チームリーダー）	
◎鬼頭英明・教授・兵庫教育大学（現：法政大学）（平成 27 年 4 月～平成 28 年 3 月）	香田由美・養護教諭・福岡県立門司学園高等学校
◎吉岡秀文・教授・兵庫教育大学（平成 28 年 4 月～平成 28 年 8 月）	上田裕司・教諭・京都市立賀茂川中学校
◎伊藤武彦・教授・岡山大学（平成 28 年 9 月～平成 30 年 3 月）	西端充志・教諭・芦屋市立精道中学校
松村京子・教授・兵庫教育大学	山下和美・養護教諭・愛知県安城市立安城西中学校
秋光恵子・教授・兵庫教育大学	吉本佐雅子・名誉教授・鳴門教育大学
中山いづみ（生健，岡山大学，Ｄ３）	青山翔・教諭・愛知県大口町立大口南小学校
西岡美智子（生健，兵庫教育大学，Ｄ３）	山本訓子・養護教諭・宮城県利府町しらかし台小学校
上田裕子（先端，兵庫教育大学，Ｄ３）	矢野真樹子・教諭・神戸市立北山小学校
北垣邦彦・教授・東京薬科大学	吉澤千夏・准教授・上越教育大学
並木茂夫・事務局長・(公財)日本学校保健会	池川茂樹・准教授・上越教育大学
富岡剛・教諭・鹿児島県立加治木高等学校	宮本香代子・教授・岡山大学
森田富士子・養護教諭・平安女学院中学校・高等学校	山内愛・助教・岡山大学（平成 29 年 3 月まで院生として参加）

プロジェクト全体の研究経過及び研究成果

【研究経過】　この共同研究プロジェクトは，当初兵庫教育大学先端課題実践開発連合講座の鬼頭英明教授が，「健康課題に関しては，学校教育の段階から継続的かつ系統的に一次予防の視点で進めていく必要がある。学校では小学校から高等学校まで健康に関しては指導することとされているが，海外の教育と比較した研究は極めて少ない」ことに着目し，包括的健康教育の構築のための基盤形成のために国際的比較研究を学際的なアプローチを用いて行うよう企画したものである。

学際的アプローチの柱は，発達科学・情動科学等の視点，薬物乱用医防止教育の視点，そして生命科学の視点から視点を基本とし，隣接する諸分野も取り込んだ研究を進めた。

当初の研究目標では包括的健康教育プログラムの構築とその実践者について，「何を教えるのか」，「どう教えるのか」に相対的に重きがあったが，研究の進展に伴い「誰が教えるのか」という視点も重要となった。このことに気づかせてくれたのは，海外調査（米国ロードアイランド州）で出会った事例や現地の研究者・教育担当者との交流である。

最終的には，上記の学際的アプローチの理論的取りまとめと学校現場における実践を集積し，主な成果を大規模学会の公募シンポジウムとして採択された場において発表した。また我が国における健康教育の理論と実践を支えている日本学校保健会の出版物として，研究成果を取りまとめて公刊した。

【研究成果】

・主たる調査活動　米国ロードアイランド州ロードアイランドカレッジの健康教育・身体教育学科で訪問調査を行い，現地研究者の案内で現地の学校を訪問し School nurse teacher（一般の School nurse が看護職員であるのに対し，この職種は教育職員である）に聞き取り調査を行った。

・研究成果報告会・研究成果報告書・著書及び論文等・国際学会における発表

１）研究成果報告会：第 76 回日本公衆衛生学会総会（鹿児島市）において，公募シンポジウム「学校における包括的健康教育プログラム構築に向けての国際比較研究」にて本プロジェクトの主な成

果を発表した。シンポジウムの詳細は以下の通りである：
座長：伊藤 武彦（岡山大学教育学研究科・教授），北垣 邦彦（東京薬科大学薬学部・教授）
1．情動科学に基づいた子どものための心の健康教育　松村 京子（兵庫教育大学連合学校教育学研究科・教授）
2．アメリカの健康教育と日本の薬物乱用防止教育　鬼頭 英明（法政大学スポーツ健康学部・教授）
3．子どもの運動習慣と健康増進～国際比較を通して～　池川 茂樹（上越教育大学大学院学校教育研究科芸術体育教育学系・准教授）
4．健康教育を担う人々と教育の実際　山内 愛（岡山大学大学院教育学研究科・助教）

２）研究成果報告書：伊藤武彦，松村京子，鬼頭英明　編著「健康教育の理論と実践　わが国と外国の事例をもとに（英文タイトル：Theory and Practice of Health Education —An international Comparison Study）」日本学校保健会・丸善出版　全 199 ページ，2018 年 3 月発行。本書の目次は以下の通りである：

第一章　包括的健康教育プログラム
1．包括的健康教育プログラムの構築を目指して －序論—　伊藤 武彦
2．喫煙，飲酒，薬物乱用防止教育から包括的健康教育へ　北垣 邦彦

第 2 章 情動科学に基づいた学校における心の健康教育
1．情動と自己制御能力を育む教育　松村 京子
2．小学校 2 年生での START プログラムの実践　中條 美由紀
3．思春期の子どもの自己制御能力・実行機能を高める教育ー小学校 5 年生の実践例—　矢野 真樹子
4．宮城県の子どもの実態から —子どもの情動教育，自己制御能力を促す教育の必要性—　山本 訓子
5．聴覚に障害のある乳幼児の養育者とのコミュニケーション －早期の教育的支援の事例を通じてー　西岡 美智子

第 3 章　エピジェネティックスの視点を生かした健康教育
1．生命科学の知見を通して考えるこれからの健康科学　吉岡　秀文
2．「生命科学の知見を通してみた健康科学」の授業の取り組み　吉岡　秀文

第 4 章　米国の健康教育と日本の薬物乱用防止教育
1．アメリカの健康教育と日本の薬物乱用防止教育　鬼頭　英明
2．医療系大学生等への薬物乱用防止教育プログラム開発に対する実践学的研究　上田　裕子

第 5 章　包括的健康教育プログラムの構築とその実践者
1．子どものヘルスプロモーションの推進における教師の役割 －中学生の教師への相談行動を中心にー　秋光　恵子
2．子どもの運動習慣と健康増進　池川　茂樹
3．就学前の子どもに対する健康教育—健康にかかわる自立を促すために—　吉澤　千夏
4．健康教育実施者の国際比較　山内　愛
5．ロードアイランド州における包括的健康教育　エリザベス　イングランドーケネディ
6．小学校管理職から見た包括的健康教育プログラムの必要性　宮本　香代子

第 6 章　私たちの包括的健康教育のこれから　　ーまとめに代えてー　伊藤　武彦

注：本書は海外の研究者の寄稿（原文・訳文ともに掲載）もあり，今後の研究者や現場教員等の海外との交流も見据えて，英文タイトル，英文目次等，各節の英文抄録など，できる限り二か国語対応で作成した。

３）著書及び論文等
・鬼頭英明、大麻等薬物乱用の拡がり、週刊教育資料、1461、21-23　(2018)
・北垣邦彦，喫煙、飲酒、薬物乱用防止教育，学校保健の動向（平成 29 年度版）（公益財団法人日本学校保健会） 118-123，2017.
・北垣邦彦，喫煙、飲酒、薬物乱用防止教育，学校保健の動向（平成 28 年度版）（公益財団法人日本学校保健会） 123-127，2016.
・北垣邦彦，第 4 章 我が国の薬物乱用防止教育，危険ドラッグ問題の表と裏～学生に知ってほしいこれからの薬物乱用防止について～（株式会社薬事日報社）91-110，2016.
・北垣邦彦，第 1 部 第 3 編 第 12 章 喫煙，飲酒，薬物乱用防止に関する教育，新訂版学校保健実務必携＜第 4 次改訂版＞（株式会社第一法規）857-913，2017.
・松村京子，（翻訳書）青年期発達百科事典（子安増生，二宮克美監訳）（青年期発達百科事典編集委員会） 第 1 巻：発達の定型プロセス，pp.199-210，丸善出版，2015
・松村京子他 ，（編著）自然科学のためのはかる百科 ，丸善出版，2016
・松村京子，赤ちゃんとの継続的交流体験学習－情動知能・養護性を育むためにー，世界の児童と母性 Vol.76，pp.75-80，2015
・Mizuno K, Tanaka M, Tanabe H, Joudoi T, Kawatani J, Shigihara Y, Tomoda A, Miike T, Imai-Matsumura K, Sadato N, Watanabe Y, Less efficient and costly processes of frontal cortex in childhood chronic fatigue syndrome, NeuroImage Clinical 9, 355-368, 2015.

・Yamamoto N, Imai-Matsumura, K, Gender differences in executive function and behavioural self-regulation in 5 years old kindergarteners from East Japan, Early Child Development and Care, 1-12. doi:10.1080/03004430.2017.1299148, 2017
・松村京子, 尾滝名津子, 山本訓子, 後藤則子, 5歳児の注意問題・攻撃的行動に対するSTARTプログラム実行機能レッスンの効果, 子どものこころと脳の発達 8(1) 47-58, 2017
・松村京子, 『新・臨床発達心理学』 第4巻「社会・情動発達と支援」 第8章 社会・情動アセスメントの考え方 第 2 節 情動のアセスメント 第 3 節 社会性のアセスメント, pp.142-152, 2017

４）国際学会における発表
・Imai-Matsumura K, Kishimoto K, Koike R, Narita H, The difference in the effect of the START program on executive functions between 4- and 5-year-old children., The 17th European Conference on Developmental Psychology (Portugal, Braga), 2015. 9.9.
・Nishioka M, Imai-Matsumura K, Eye-gaze responses of hearing-impaired children to a picture book and a reader's face., The 17th European Conference on Developmental Psychology (Portugal, Braga), 2015. 9.10.
・ Imai-Matsumura K, Aoyama S, Yamamoto N, Relationship between executive function, self-regulation, and agility during early childhood, The 18th European Conference on Developmental Psychology (Netherland, Utrecht), 2017. 8.30.

(注)氏名欄は適宜増減してください。
＊字数の制限はありません。記述欄が不足する場合は，複数枚になっても構いませんので適宜行数を増やしてください。